

編集後記

昨年の大晦日、高島正夫先生は亡くなられた。だれにも予期できない突然のことであつた。それから、はや一年が経とうとしている。

その間、商法研究会の加藤修教授が中心となつて、本追悼号が編まれた。集まつた論説はゆうに十本を超えた。編集委員会として、ご寄稿くださった執筆者の方々に深く感謝するとともに、先生の一週忌に合わせてこの号が上梓できたことを嬉しく思う。

側聞するところによると、高島先生は、研究会や合同演習において、同席した後輩諸教授や大学院生の自由奔放な議論にたじつと耳を傾けるだけで、最後になるまで決して口を出されることがなかった、そしてその最後のご発言は、いつも厳しい正論であつたという。先生の、ふだんお見受けした柔和な笑顔に隠された、厳しい学者の顔である。そんな先生の笑顔が懐かしく思い出される。

昨年の夏、軽井沢で、筆者は高島先生、奥様の林脇トシ子先生と食事をともにする機会があつた。落日の赤が印象的な夕方であつた。高島先生は、近くの町にできた大きなショッピング・センターに行つてきた、君は多分まだでしようとおっしゃつて、嬉しそうに笑われた。そんな、茶目つ氣たつぷりの子どもっぽさも、高島先生に欠くことのない一面であつたと思う。そのとき、来年には是非そのセンターにご一緒しましょうと約束をした。今年の夏、その約束が果たせなかつたのは残念である。

編集委員会として、あらためて高島正夫先生のご冥福を祈り、この論文集を先生の霊前に捧げたい。

二〇〇〇年十一月

法学研究編集委員会